

第2回協議会での「全体構想」に対する意見への対応について

：骨子修正案に対応する番号

分類	意見		対応策	
「はじめに」 「1. 背景と経緯」に関連して	わかりやすい表現	<ul style="list-style-type: none"> ・「はじめに」では、わかりやすい言葉を使うことが大切。 ・情念に訴えるような阿蘇草原の価値の評価も、一般の方に参加していただく上で考えた方がいい。 	わかりやすく魅力的な表現に心がける。	1
	阿蘇のアピール	<ul style="list-style-type: none"> ・日本に留まらず世界に冠たる阿蘇、カルデラをもっとアピールする。 ・世界に誇るカルデラの中にある草原というイメージを、外の人が理解できるようにすることが大切。 ・草原の素晴らしさをもっと知らせるべき。ニュアンスが弱い。 ・景観の魅力も謳うべき。 	「はじめに」で対応する。	2
	昔の農業の価値の再認識	<ul style="list-style-type: none"> ・効率化だけでない大切さを訴えていく。さらに昔の農業の価値を再認識するということを考えてみてはどうか。 	「はじめに」、「背景と経緯」で考え方を述べる。	3
	農業者の生活が前提	<ul style="list-style-type: none"> ・阿蘇の農業者の生活を大前提に考えるべき。 	「はじめに」で対応する。	4
	経済的な価値の評価	<ul style="list-style-type: none"> ・観光客などにも分かるよう阿蘇の草原の価値を数値的に示せないか。 ・阿蘇の草原について経済的な価値の評価も必要になる。 	データがあれば、「1(2)阿蘇の草原の価値」に入れるが、構想づくりのために新たに調査はしない。	5
	草原文化、水	<ul style="list-style-type: none"> ・草原を語る際には、維持管理だけでなく、草原の文化の大切さをしっかり位置づけることが必要。 ・阿蘇の草原は水瓶である。この水の大切さを文化の名のもとに取り上げるべき。 	1(2)草原の価値、4(3)取り組みで触れる。	6
「3. 目標」に関連して	具体的にどうしていくかを明確に	<ul style="list-style-type: none"> ・具体的にどのようにして「子供たちの世代に引き継いでいく」かを明確にしないと、ただ書いただけになる。 	「目標」は、わかりやすい将来像を示すものとし、具体的に何をするかは取り組みの中で対応する。	7
	「昭和30年代のような…」	<ul style="list-style-type: none"> ・「昭和30年代のような」という言葉が曖昧、また何を指しているのか分からない。 ・「昭和30年代」というと、地元の人ならイメージが湧くかもしれないが、一般には分かりにくい。 ・「昭和30年代」という表現は曖昧で改める必要があるが、言い換えると、30年代まではシステムがうまく回っていたということ。それを現在にどのように再現していくなか、ということ。 ・30年代の状態はイメージ可能で、入会権者は新取りにもいっていた。その後、システムがうまく成り立たなくなったということ。 ・30年代の野草地に戻すのは難しい。 ・阿蘇の生活、文化、農業形態の転換期であることを明確化すれば分かりやすい。 ・30年代を検証して、そのことを知らせる必要がある。 ・どのようなイメージかを含めた目標の掲げ方が必要。 ・植林前のイメージ。 ・現代のやり方での循環システムについて、具体的な説明が必要。 	いろいろな意見があり、一致させることは困難なため、「目標」として取り上げることはやめるが、説明部分で、30年代までの循環型社会のしくみについて触れる。	8

分類	意見		対応策	
	数値目標	<ul style="list-style-type: none"> ・数値目標を掲げた方がアピールしやすい。たとえば、国立公園内で守るべき草原の量、いま放置されている土地をどれだけ復元させるなど。 ・大目標、個別目標をゾーン化して具体的な場所や面積を示したらどうか。 ・保全する具体的な場所や面積を掲げたらどうか。 ・数値目標に加え、実現の方策も必要。 ・全てに数値が必要なわけではない。 	<p>基本的な方向をつくるのが今回の構想。具体的な場所の土地利用について関係者間で調整して合意を得たり、新たに根拠となる数字を出すことは今回の作業では難しいため、具体的な場所や数値目標は掲げない。</p> <p>ただし、5(2)、(4)取り組みの進め方で場所別の対応や科学的な分析、実証的進め方が重要であることを記述する。</p>	9
	キーワードを決める	<ul style="list-style-type: none"> ・抽象的な言葉を整理をし、キーワードを決めて盛り込んだらどうか。 ・「農の恵みモデル事業」のように、情念を伝えられるようなキーワードを考える。 	全体を文章化した上で、検討する。	10
	全体の自然保護の一環として捉える	<ul style="list-style-type: none"> ・阿蘇の草原を守ることは、自然の大切さを学ぶ、あるいは、全体の自然保護の一環であるという書き方もあるのではないか。 	環境学習の取り組みの中で、自然の大切さを学ぶ場として草原を利用していくことを記述	11
「4. 取り組み」 牧野利用関連	多様な人々が参加する支援の仕組み	<ul style="list-style-type: none"> ・1 昨年導入した刈り干し切りのボランティア（ツアー）など良いが、個人の作業なので、組合として受け入れをまとめるのは大変。 ・野焼きなどに参加する高校生以上の若い人が増えてきているという報告もある。輪をつなげて若い人を増やしていくことが大切。 ・地元の人だけが維持管理に大変な思いをするのではなく、幅広く観光客なども含めて、維持管理に協力できる仕組みを考えていく必要がある。 	多様な形での牧野の維持管理、ということ表現。具体的な個々の取り組みは例示程度ですべては記述できない。	12
	ボランティアによる支援	支援ボランティアは600人を超し、グリーンストックではコントロールが難しくなっており、うまく調整する必要がある。今後、拡大していくためには、さらに工夫が必要。	4(1)取り組みの中身に入れる。	13
	集落による管理形態の復活	集落ごとに昔ながらの管理形態を復活させていく方策も考えてはどうか。	4(1)で集落としての関わりの重要性を指摘する。	14
	利用されなくなった草原、荒廃地の利用	<ul style="list-style-type: none"> ・荒廃した所を再利用していこうというのがよい。たとえば、バイオマス利用など。 ・条件の良い草地は牛に使う。バイオマスに使うのは牛に使わない斜面で、それを使い切れるのかは疑問。有畜農家がいなくなった牧野なら、バイオマスに貸すこともあるだろう。 	利用して草原に戻していくということで、4(1)取り組みの中身で対応する。	15
	再生、保全の取り組み例	<ul style="list-style-type: none"> ・夜峰山など放棄された草地で野焼きを再開すれば再生といえる。また、ダイコン畑になったかもしれないのを留めたということであれば保全したということになる。 	野焼きの再開など、4(1)取り組みの中身で表現する。	16
	放牧の推進による草原保全	<ul style="list-style-type: none"> ・牛を減らさないようにする。牛馬を利用した草地の保護。預託受入牧野の確保。後継者の育成を目指す。 	放牧利用ということで4(1)で読めるようにする。	17

分類	意見		対応策	
「4. 取り組み」 生物多様性関連	動物	<ul style="list-style-type: none"> 動物についても乱れが出ている。それらをどう防ぐかも必要。 貴重な動植物の減少の要因として、イノシシなど他からの動物の移入もあるということか。そのようなことは現状把握の必要はある。 	<p>チョウなど草原性の動物については記述。</p> <p>他から進入している動物について、自然再生という大きな枠では入れるべきだが、記述するかどうかは検討が必要。</p>	18
「4. 取り組み」 草原環境学習 関連	多様な対象に対応した草原環境学習	<ul style="list-style-type: none"> 経緯や取り組みについてもっと具体的に知らせる必要がある。 小学校の総合学習の時間を使って、子どもたちに阿蘇の草原を伝える。 たとえば、草原内に大きな迷路を作って、春から秋にかけて家族での草原体験の場として利用したり、遊びを通じた草原体験も考えたらどうか。 子どもだけでなく地元の人々に阿蘇の草原のことを伝えたい。 一般の方に阿蘇の草原の成り立ちや、草原の自然環境の問題などをできるだけ分かりやすく理解していただく。 阿蘇の景観などを享受する人たちに、阿蘇の草原の必要性を教えていく。観光客と阿蘇の牧野の関係を築くような施策を取り込む。 	4 (3) 取り組みで、これらの内容の趣旨を、できるだけ表現するようにする。	19
	草原に愛着を持つ人の拡大	<ul style="list-style-type: none"> 愛着を持つ人の拡大が重要。後継者につなげる。 	既に記述あり。	20
	草原文化	<ul style="list-style-type: none"> 昔の「草の道」、牛が通った道の再生が必要。 草原文化を守る。 	文化については、1 (2) 草原の価値や4 (3) 環境学習の取り組みで表現。伝えていくべきもの、また理解してもらうための手段でもある。	21
	地域内外の交流促進	<ul style="list-style-type: none"> 他の人との交流があって初めて地域の良さが分かる。自分たちには普通のことだが、他の人にはすばらしいということがある。 	交流の場づくりといった表現のなかで触れる。	22
	人材確保	<ul style="list-style-type: none"> 人材（地元を含む）の確保が重要である。 	4 (3) に人材確保、拠点づくりについて入れる。	23
	拠点	<ul style="list-style-type: none"> 地元の学習体験施設を活用するために、施設や使い方の情報共有が必要。 全体の問題として、草原再生の情報発信拠点のようなものが必要。牧野の人たちが説明したりする。 	環境学習に関連するので、4 (3) に加筆する。	24
「4. 取り組み」 野草資源関連	経済的な価値	<ul style="list-style-type: none"> 草原としての経済的な価値を見出す必要がある。そのためには持続可能な草原の利用形態を生み出していく必要がある。 付加価値による経済基盤の創出とあわせて、担い手づくりにつなげていく必要がある。 	既に表現してある。 また、経済基盤の創出イコール担い手づくりと考える。	25
観光関連	観光業も含めた再生	<ul style="list-style-type: none"> 観光サイドも含めた草原再生の取り組み方を盛り込むべき。 	4 (3) 取り組み、5 (5) 進め方に関連して記述。既にある。	26
「5. 取り組みの進め方」 関連	情報発信	<ul style="list-style-type: none"> 草原景観などを享受する側と阿蘇にいる人の相互の情報発信をやっていける形にする。 情報発信について、発信先や発信の仕方を明確にして、伝えるべき人に伝えられるようにしてはどうか。 地元同士の情報交換。 	5 (6) 取り組みの進め方に、趣旨を記述。	27

分類	意見		対応策	
		<ul style="list-style-type: none"> ・ 伝えた人たちが阿蘇に興味を持ったり入ってきたりというときに、受け入れ先がしっかり明示されるような形で発信できればいい。 	全体構想では、取り組みを進める際の具体的な方策までは記述しない。	28
	多様な主体との連携	<ul style="list-style-type: none"> ・ 行政と連携して進めることの重要性。 	5 (3) 取り組みの進め方に記述。	29
畜産関連	2. 再生の対象、 3. 目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ 適切な畜産を維持するために、どのような草原再生の対象や目標を掲げるかという点が抜けている。 ・ 畜産農家からみると「野草地維持のために、人工草地も必要」という表現は違和感がある。地域にとっては、畜産を維持していくための野草地ではないか。 	自然再生の対象としては「野草地」となるが、「農畜産業そのものが元気になることが必要で、そのためには人工草地が必要」という言葉を補う。	30
	従来型の振興施策	<ul style="list-style-type: none"> ・ 畜産が継続できるような仕組みづくり。 ・ 畜産を維持していくには改良草地も必要。改良草地も残した草原再生とし、自然再生の中でも改良草地の更新等を盛り込む。 ・ 人工草地は畜産において不可欠。周年放牧のためなど、今後も野草地を改良したいという牧野はある。 	改良草地の更新は自然再生とは相容れないため、今後の牧野改良の推進については、構想に記述することはできない。	31
	あか牛	<ul style="list-style-type: none"> ・ 阿蘇の草原は、あか牛を飼うことによって守られてきた。赤牛のことも書き込めないか。 ・ あか牛が草原維持に貢献するという点で、あか牛放牧の促進などを考えていくとよい。 ・ 見えるところに牛が放牧されていない。見せることで価値が上がる。 ・ あか牛を全国ブランドに、もっと人々に知られるようにする。 	構想は畜産そのものを支援する計画ではない。また、協議会には全ての畜産団体や牧野組合が参加しているわけではないので、活性化に向けて側面から応援することはできるが、それ以上はできない。放牧に適し、阿蘇の草原を特徴づけているあか牛については、環境学習や野草利用に関連した取り組みを進めるなかでアピールが可能であると考えられる。	32
森林関係	背景と経緯	<ul style="list-style-type: none"> ・ 背景と経緯で、植林のいきさつ、草原の減少の状況について説明する必要がある。 ・ 森の荒廃ははなはだしい。牧野として利用しないところに木を植えたために、そのような状況になった。 	経緯と背景で触れる。取り組みに関する記述については、検討が必要。線引きなどの議論の際は当事者がいない中では難しい。今後、関係者の協議会への参画を求めていくことが必要。	33
	林野関連の参画が必要	<ul style="list-style-type: none"> ・ 森林所有者が輪地を切らなければ野焼きができない。森林関係者がいなければ、議論が行き詰ってしまう。 ・ 昔に戻すのではなく、未来をどう作っていくかが重要。そのためにも、森林関係者の方も、この草原再生のメンバーに含めたらどうか。 		
その他	小委員会の連携	<ul style="list-style-type: none"> ・ 小委員会相互のつながりをきちんと打ち出していく必要がある。 ・ 草原再生の進め方については各小委員会でも詰めていく必要がある。 	「取り組み」の項目間のつながりについては、その都度明記する。	34